

悪魔の Merry X'mas

序

妹は、生まれたときから体が弱かった。

「ねえ、お兄ちゃん。この子、かわいそうだよ」

「でも、犬なんて拾って帰ったら、お母さんが怒るし……」

体重二千グラムに満たない未熟児だった妹は、心臓にも大きな欠陥があった。本来なら閉じるべき心臓に開いている穴が、塞がらないままになっているのだと、医者は言っていた。

「こんなにぬれちゃったら、風邪引いちゃうよ」

「せめて屋根のあるところがあればなあ……」

その所為で、妹の心臓は大きな負荷に耐えられない。負荷がかかれば、それだけ妹の心臓は疲弊し、やがて脈打つ力すらも失ってしまう。

だから、外へ出るときはいつも誰かが付き添ってあげなければ行けない。

休日は、それが俺の役目だった。

「あ、お兄ちゃん、あそこにたばこ屋さんがあるよ」

「どこ？ ……あ、ホントだ。ちょっと遠いけど、あそこまでなら」

小さい頃、良く二人で散歩に出かけた。

晴れの日も雨の日も、妹は外に出たがった。同い年の子ども達が走り回って遊んでいる中、一緒に遊べない妹にはそれが唯一の楽しみでもあったからだ。

帰りには息が上がってしまう妹を、俺は背中に負って歩いた。

傘を持つのは、妹の役目。

「よいっしょ、よいっしょ……ふう。ここならこれ以上濡れなくてすむかな」

「でも、寒くてふるえてるよ？」

「確かタオルがあったから……よし、これで拭いてあげるか」

「ミオもやる！」

足になるのは、俺の役目。

「しっかり拭いてな」

「うん！」

いつか心臓の手術を受けなければならないと言われ続けながら、時は過ぎていった。そんな「いつか」なんて、来なければいいと思っていた。

「あったかくしてあげようね！」

思っていたんだ。

「やァ、ソコの君！ 不景気がハダシで逃げていきそうな顔をして、どうしたネ？」

そりゃどんな顔だ、と、いつもなら誰彼構わず突っ込みを入れるところだが、その日の俺にはそんな元気は毛筋ほどもなかった。

恐らく声の主が評する通りの真っ暗な顔をして、俺は駅前の大通りをふらついている。いや、たぶんまだ駅前の大通りのはずだ。なにぶん、俺はここ二時間ほど一度も顔を上げていない。ただただ同じところをグルグル回っているだけだ。

「君ィ、聞こえているなら返事くらいしたらどうかネ？」

実際聞こえてはいるが、鬱陶しいから聞いていないことにしているのに。そう心の中でぼやくのも今は酷く面倒だった。

こう言うときに声をかけてくるヤツは、マルチ商法か新興宗教と相場が決まっている。失意の内にいる人間をすくい上げるフリをして、とことんまで搾り取ろうとするハイエナを、これまでも何度となく追い払ってきた。

「いかなァ、若い内から聾啞(ろうあ)を気取っちゃ。放送コードに引っかかっちゃうヨ？」

引っかかるのはお前だろう、と言いたい。

取り敢えずこういう手合いは無視するに限る。相手をするとどこまでも付けあがってくるし、時間の無駄だ……とはいえ、今俺がこうしているのも決して有意義な時間といえないのが悲しいところではあるが。

しかし、相手も引き下がるつもりはないらしい。俺の側を右へ左へ蛇行しながら、粘っこく湿度の高い声質でしゃべりかけてくる。

「悩み事ダロ？ 不幸な出来事ダロ？ ほらほら話してみなさいヨ」

確かに悩み事で不幸な出来事だが、それを見ず知らずの他人に話してやる義理はない。まるで人の不幸は蜜の味とでも言わんばかりに近寄ってくるヤツにはなおさらだ。

それに、話したところでどうにかなるような次元の問題ですらない。

「遠慮なんか似合わないヨ？ 【人間】なんだから、モット欲望に正直に生きなきゃ」 望んで得られるものなら、いくらでも望んでやる。それこそ、

「『妹さん』の、ためにもネ？」

「ッ!？」

悪魔に魂を売ってでも。

前編

「何でお前がそんなことぶふおツツ!？」

「人の顔を見て嘔き出すなんて失礼じゃないかネ？」

不意打ちの驚愕にヴィジュアル面の驚嘆が加わって、俺は思わず全てを忘れて嘔き出した。

目の前に現れた男……だと思われる生物は、ガリガリの細い体に世紀末霸王伝説も真っ青な鉞付き革ジャケットを身に纏い、今時滅多に見ない白塗りの顔に珍妙な模様を描いてそこに立っていた。唯一まともな色つやの黒髪はどう考えてもまともじゃない、まるで山羊か何かの角のようにねじくれたスタイリングで頭の頂上に鎮座している。

胸からは十字架を逆さまにして、ご丁寧に蛇だかなんだか良く分からない何かを絡ませたネックレスを下げ、両手を中世の鎧にでもついてそうなガントレットでよろったその男は、先のとがったブーツのかかとを二回鳴らして頭(こうべ)を垂れた。

「ヤァヤァ、挨拶が遅れたネ。ワタシの名前はグラシャ＝ラボラス。気軽に【グラたん】とでも呼んでくれたまえヨ」

「呼ぶかッ！ 【たん】づけで呼べるような顔じゃねえだろ！」

「おや、ザンネン。最近流行っていると聞いたのだがネ」

全く残念そうな顔をせず、目の前の男——グラシャ＝ラボラスは軽口を叩いた。透き通る青い瞳とは裏腹に、真っ赤に燃えるような舌をちらつかせて薄笑う。

とんでもないヤツに目をつけられたと思ったが、しかしさっきの一言は聞き捨てならない。

「おいお前……さっきの言葉はどういう意味だ？」

「やっぱり【グラたん】が気にいったかネ？」

「そっちじゃねえッ！ 妹がどうとかって方だッ！」

突っ込むたびにドツと疲れるのを自覚しながらも、俺は何とか本題に話を持って行くべく話題を強制的に戻した。

男は一瞬きょとんとした顔をしたが、すぐさま薄ら笑いに戻って俺の方に顔を近づける。

「やっぱり、欲望に正直になる気になったかネ？」

「そう言う訳じゃない！ ただ、なんでお前が俺の妹のことを知っている？」

「そおんなコト、簡単なことダヨ」

再び軽口を吐くと、男は人差し指……ガントレットを装着したままの物々しい指を俺の額の方へ向け、得意げに言い放った。

「思考を読んだんだヨ、君の脳の中からネ」

今度は自分のこめかみに指を向け、トントンと叩く。まるでさも当たり前とでも言うかのよう。

俺はしばらくあんぐりとしていたが、それが過ぎると同時に一気に頭の中が冷めていった。

間違いない、こいつは電波さんだ。それも、相当に重症な。

妹、と言われてうろたえたが、恐らくはそれも当てずっぽうに言ったのだろう。もし俺に妹がいなかったら、何事もなかったかのように別の不幸そうな顔の人間に近づいて同じ事をするのだ。たまたま俺に妹がいたことは、運がなかったとしか言いようがない。早めに追い払おう。と言うか、このおかしな格好の男と知り合いだと思われたくない。

「悪いけど、俺には誰かの相手をしてるような余裕はないんだ」

「それにしてはキレの良いツッコミだったネ？」

「五月蠅い！」

つい反応してしまう自分が悲しいが、そんなことを言ってる間にも男はじりじりと接近してくる。一刻も早くこいつとは縁を切らねば。

「とにかく、これ以上つきまとうな。今なら見ず知らずの人間でも平気で殴れるぞ」

脅しではなかった。それくらい今の俺には心のゆとりがない。いや、実際に殴りたかった。だが、それは目の前のこの変態に対してではない。不甲斐ない自分に対してと、そしてもう一人。

しかし、男は俺の台詞を聞いて遠のくどころか、逆に大声で笑いながら拍手を始めた。あまりの気味悪さにこのまま走って立ち去ろうかと思った時、男はもう一度俺の意識を飛び上がらせた。

「それは頼もしい！ さぞかし心臓の悪い妹さんには心強いだろうネ！」

「な……!？」

振り向いた俺に、男は嫌らしい笑みを送り返してきた。だが、今度は無視できない。当てずっぽうにしても的を射すぎている。

まさか、本当に俺の頭の中を読んだとでも言うのか？

「『まさか、本当に俺の頭の中を読んだとでも言うのか？』」

「！」

「あァらら、『当てずっぽう』でも当たるもんダネ」

間違いない。

こいつは、俺の思考を完全に読んでいる！

両手にじっとりと汗が浮かんだ。どうやら、俺はとんでもないヤツを目の前にしているらしい。冗談のような格好をした男だが、その内側に潜んでいる得体の知れない何かに、俺は今更ながら戦慄した。

「そんなに身構えなくても良いんじゃないかネ？ 別に取って喰おうというわけでもナシ」

「……お前、何だ？」

何者、とは言えなかった。少なくとも、今男が纏う気配は既に【人間】の雰囲気ではない。

男は薄ら笑いを深めると、足が硬直して動けない俺に顔を近づけ、そっと耳打ちした。

「悪魔、デスヨ。ア・ク・マ」

君たちの言葉で言うとネ、と付け足し、男は俺から少しだけ離れた。俺は一気に噴き出した額の汗を拭うことも出来ず、そこに立ち尽くす。

「カークリノラスなんて呼ぶ人間もいますがネ。ソロモン七十二柱の二十五番を任された、これでも立派な貴族なのだヨ？」

さっきまでの憤りは、完全に行き場を失ってしまっていた。目の前の男が言葉通りの【悪魔】かどうかは分からないが、今ならその表現を肯定できる。

リアルタイムで思考を読める人間なんて、この世には存在しない。

「納得いただけたようで何よりだネ」

「……その格好には納得いかないけどな」

「そうかネ？ 結構気に入ってるのだが」

強がって見せたが、それすらも見通されているようだ。男はニヤニヤ笑いを崩さない。

しばらく時間が止まったかのようにどちらも動かなかったが、ややあって男はわざとらしく何かを思い出したかのように手を打つと、黒い革ジャケットの内側をごそごと探って何やら手帳のようなものを取り出した。

「さてサテ、それじゃ契約の話に移らせて貰っても宜しいカナ？」

「……契約？」

「ウイ、ムシュー」

何故かフランス語で返答しながら、男は手帳から一ページを切り取り、こちらに投げてよこした。思わず条件反射で拾おうとしたが、そんなことをしなくても紙切れはまるで吸い付くように俺の手の中に収まる。

それだけでも驚くべき事だが、最早俺の中ではその程度のことはどうでも良くなっていた。男は俺のリアクションの薄さにがっかりした様子でため息などついていたが、放っておくことにする。

どうやら羊皮紙らしいその紙切れを見ると、そこには何かのゲームで見たような奇妙な文字が羅列していた。アルファベットのようにも見えなくもないが、いずれにせよ読めるものではない。

「……あア、日本語版が良かったかネ？」

「最初からそっち出せよ！」

渋々といった感じでもう一枚の紙を千切る男を半目で睨みながら、俺は新たに受け取った紙に目を通した。

そこには、おおむね次のようなことが書かれていた。

・ 契約内容

- 1)本契約は個の人間と個の悪魔の上で為される
- 2)本契約の執行は契約締結から24時間以内に為される
- 3)本契約は欲望の総量と魂の総量が釣り合って初めて為される
- 4)本契約は途中で破棄することを認めない
- 5)本契約はクーリングオフ非対象商品である

取り敢えず五番は見なかったこととして、最も気になったのは三番の項目だ。古来より悪魔との契約と言えばその代償は自らの魂と相場が決まっているが、どうやら目の前の男——自称・悪魔——との契約も、それに乗っ取っているらしい。

しかし、欲望の総量と魂の総量が釣り合うって言うのはどういう意味だろう？ 魂って言うのは一人に一つしかないんじゃないだろうか。

「総量というのは、そう言う意味じゃないのダヨ」

「むやみに頭の中を読むのはやめろ……」

ある意味便利ではあるが、気味が悪い。だが男は全く意に介した様子もなく説明を始めた。

「魂の総量とは、いわば魂の質量だネ。魂にも大きさや重さがあるのダヨ。小さい赤ん坊でも、大成する人間の魂は大きいし、どんな巨漢でもろくな人生を送ってきてなければ魂はネズミ以下。勿論、例外はいくつもあるがネ」

「魂の質量……」

はっきり言って想像もつかないが、どうやら同じ人間でもそれぞれに魂の価値って言うものがあるらしい。人類皆平等と唱える人間からすれば、憤慨ものだろう。

だが、確かにあるのかもしれない。

魂の価値。

だとしたら、俺の魂は一体どんな価値を持っているのだろうか？

「君の魂は……」

「いや、言わなくても良い」

ろくでもない魂だとしたら、それはそれで落ち込む。今までの人生を有意義に送ってきたかと言えば決してそうは言えないが、それでも自分の中身を評価されるほどには俺は満足に生きていない。

もう一度、俺は契約の書かれた紙に目を落とした。契約は、欲望の総量と魂の総量が釣り合ったときに初めて為される。つまり、望むものが魂の質量に対して身の程をわきまえない大きさであれば、契約は成り立たないということだろう。

でも、契約が成り立つ場合は？

「モチロン、魂は頂くヨ」

「.....死ぬ、って事か」

「【永久】にネ」

予想通りの答えに、変な安堵感を感じた。永久に、の意味は分からないが、恐らくは輪廻転生だかなんだかの難しい話に発展するに違いない。

「悪魔との契約、か」

正直、そんなものを結ぶ気はなかった。

俺にも欲望とやらは、確かにある。それも、二つ。

だけど、一つは俺と引き替えに叶ったところで喜んでもらえるかどうか分からないし、もう一つはたとえ俺と引き替えでなくても誰も喜ばない。

誰もが心の底から「良かった」と思える欲望を、俺は持ち合わせていない。

「魂と引き替えれるような欲望はないよ」

「おヤ？」

本気で不思議そうな顔をする男。俺は無言で羊皮紙を突き返したが、男はそれを受け取ろうとしない。

「君の魂の総量を持ってすれば、妹さんの心臓の穴は塞がるし、意識もイッパツで回復するヨ？」

背中にかかる言葉を、俺は無視して歩き始めた。

確かに、そうなるかも知れない。男の言う契約が為されれば、今も意識不明で病院のベッドに縛られている妹は、目を覚ますかも知れない。手術が絶望的と言われた心臓の穴も、塞がるかも知れない。

けども。

「妹さんを意識不明にした男も、殺せるしネ」

俺は振り返りざまに男の襟首をつかんだ。いつの間にか背後に立っていた男はほんのわずかに驚いたような顔をしたが、しかしすぐにさっきまでの笑みに変わってじっとりとした言葉を投げかけてきた。

「憎いでしょ？ 妹さんから意識を奪ったあの男ガ」

「.....」

ぎり、と渴いた音が鳴る。

それが自分の爪が掌に食い込む音だと気づくのに、時間がかかった。

男はますます笑みを深め、俺の表情をのぞき込んでいる。

憎悪の表情。

俺は、確かにそれを心の奥底で望んでいた。

妹をトラックではね、逃げていったあの男。

実際には車体の一部がかすただけだったため、幸い傷は浅かったが、心臓の弱い妹にとっては車にはねられたというショック自体が大きかった。

一度にのしかかったストレスは妹の心臓から正常な動きを奪い、心臓が痙攣を起こした状態になった。迅速な対応で一命は取り留めたものの、今も妹の意識は戻っていない。

予定されていた心臓の手術も、この状態では絶望的だと言われた。このまま放っておけば、突然死のリスクもあると。

俺は、吼えた。

人の目もはばからず、俺は病室で叫んでいた。

そいつを殺してやると。

何処までも追いかけて、必ず殺してやると。

初めて、殺意というものを、知った。

「ホラホラ、思い出すでショ？ そのどうしようもない殺意を。ワタシはどちらかというところちが専門だからネ。必要な魂の質量も格安だよ」

「……」

俺は、

「今ならサービスで死に至る苦痛のオプションもつけるヨ？」

「……」

俺は、

「殺し方のバリエーションも盛りだくさん！」

「……」

俺は。

「必要ない」

「おヤ？」

言い切った。

「俺は、誰かの不幸の上に成り立つ幸福なんて望んでいない」

「不幸を呼び込んだ男には不幸が相応しくないカネ？」

「その不幸は、きっとその男だけにとどまらない。そうしたら、また俺みたいなのが出てくる。そんなのは……ごめんだ」

噛み締めた唇が、震えた。

例えその男がむごたらしい最期を向かえたとして、それを見ても俺は空しくなるだけだと思う。妹も喜ばない。そして何より、その男の家族が、全く無関係なはずの家族が俺と同じ思いをするかも知れないと思ったら、俺にはとてもそんなことは出来ない。

そんなものは、ただの自己満足だ。

妹の意識は回復して欲しい。心臓も治ってくれたらどんなに良いことか。だけど、そのために俺が死んだら、きっと妹は自分を責めるだろう。不必要な罪の意識を背負い続けたまま生きていくのだろう。

それをごめんだ。

つまり、契約は必要ない。

「だから、必要ないんだ」

「そうかネ、ざァんねん無念」

特に残念そうな顔でもなく、男は言った。それどころか、どことなく嬉しそうでもあって、俺は怪訝な顔をした。

「ま、無理強いは出来ないからネ。契約は双方の合意があって初めて成り立つのだから」

「そう言うことだ」

俺の言葉に、男は現れたときと同じようにかかとを二度鳴らして頭を垂れた。そしてガントレットをはめた両手を高々と挙げると、大きくその手を打ち鳴らす。

瞬間。

「うわッ!？」

突然目も開けられないほどの暴風が吹いたかと思うと、一瞬目の前が真っ白になった。次に目を開けると、もう目の前に先ほどの男はいない。

周りを見渡したが、何処にも男の影はなかった。それどころか、あれだけの暴風が吹いたというのに、誰もが平然とそれぞれの道を歩いている。

もしかしたら、俺は夢でも見ていたのだろうか？

半ば呆然としながら、俺は近くのベンチに腰掛けた。

何か、長い時間を過ごしたかのような疲労感がある。実際、さっきまでまだ明るかったはずの周りの景色がもうすっかり暗くなってしまっている。

駅近くの商店街が色とりどりのイルミネーションに包まれているのを見ながら、俺は冷たくなった身体を温めようとコーヒーの自販機を求めて辺りを見渡した。しかしそれもつかの間、ズボンのポケットで携帯電話がけたたましい音を立て始める。

俺はあわてて携帯電話を取り出すと、余り覚えのない番号からの着信を拾った。

電話の向こうからは、息せき切ったような声。

興奮しているのか、変なところで途切れ途切れになった言葉の羅列が俺の耳朶を打ち、

俺は、ベンチから飛び出した。

後編

「ミオッ!!」

「あ、お兄ちゃん！」

病室に飛び込むと、まるで何事もなかったかのようにベッドに腰掛けていた妹が、こちらを向いて笑いかけてくれた。途端、両膝から一気に力が抜け、危うく前のめりに倒れそうになる。

点滴はまだ繋がれたままだったが、少し前まで体中に貼り付けられていた心電図や酸素濃度測定器などは全て外されていた。俺が来るまでの間に着替えも済ませたのか、最近買ったばかりの花柄のパジャマを着込んでいる。

夢、ではなさそうだった。その証拠に、瞬間的に酷使された肺と両足が、痛い。俺はしばし息を整えると、なるべく平静を装って話しかけた。

「良かったな、意識が戻って」

「うん！ ……って言っても、私にとっては全然実感がないんだけど」

そりゃそうか、と二人して笑い合う。これだけで、俺には十分だった。

話を聞いてみると、トラックが近づいてきたところからの記憶が既に曖昧になっているらしい。目が覚めたとき、自分が何故病院にいるのかも分からなかったと言う。

「目が覚めたら、点滴を変えに来た看護師さんが目をまん丸にして驚いてたから、何があったのかと思っちゃった。二日も眠ったままだったんだね」

あの日。事故のあったあの日から、まる二日。心臓の痙攣は幸い大きな後遺症も残さず治まったが、予定されていた手術は意識状態が戻って落ち着くまで延期になった。後から来た主治医に両親が聞いたところによると、もう一度精密検査を行ってからになるため、一ヶ月ほど先延ばしになるようだ。

俺はベッドの端に腰掛け、置いてあったリンゴを剥いてやった。妹は切り分けたそれを美味しく頬張っていたが、最後の一欠片を飲み込むと何かを思い出したような顔で俺の袖を引っ張った。

「そうそう、あのね。多分夢だと思うんだけど……」

「ん？」

残った皮と果物ナイフをテーブルに置いて、俺は妹に向き直る。妹は人差し指を口元に置きながら、記憶のかけらをまとめるように視線を泳がせながら続けた。

「なんかね、おっきな黒い犬が、私の横に座ってたの。海の色みたいな綺麗な目の犬」

両腕を一杯に広げながら「私の背と同じくらい」と付け足す妹。

「その犬が、寝てる私を見下ろして、何か喋ってるの。でも、言葉が難しく、私には全然分からなくて」

「難しいって？」

「んー、何か、外国の言葉みたい。それで私が『どうかしましたか？』って尋ねたら、ちょっと困ったような顔をして、一言だけ、分かる言葉で喋ったの。『起きなさい』って」

それで目が覚めたんだと思う、と締めくくり、妹は「やっぱり夢だよ」と笑った。俺も釣られて笑ったが、何となく心のどこかで引っかかるものを感じていた。

その後は他愛もない話でひとしきり盛り上がり、血液検査の時間になったのをきっかけに病室から出た。元気に振る舞ってはいるが、病み上がりには違いない。妹は残念そうな顔をしてい

たが、「また明日来るから」と言うと笑顔で見送ってくれた。

面会時間を過ぎて人のまばらになった廊下を抜け、病院の待合室までくると、俺は、設置されたソファの背もたれに最大限に背を預けた。

「……っああ」

そんなため息とも言えないような声が、思わず零れ出る。

今日これで何度目だろう、全身の力が抜けるような感覚に襲われたのは。

漠然とそんなことを考えながら、俺は真っ白な天井を見上げた。

「……奇跡、か」

何とはなしに呟く。

主治医は今回のことを「奇跡」と評した。確かに、奇跡のような出来事なのだろう。原因不明の昏睡から、全く正常な意識レベルまで一気に回復するケースは、低血糖などの特殊な病態を除いてそうあることではないそうだ。

奇跡。

だとしたら、俺がさっき体験したあの奇妙な遭遇は、まさしくその奇跡の引き金に違いない。

悪魔との契約。欲望と魂の質量。

不幸の上に、成り立つ幸福。

もし俺が、あの時あの男と契約していたら、本当の「奇跡」が起きていたのだろう。意識の回復だけじゃない、手術以外での根治は不能と言われた心臓の穴すら塞がり、妹は聖人とでも祭り上げられたのだろうか。そしてその裏で、誰とも知らない一人の男が無惨な死体で発見され、新聞の片隅を彩ったかも知れない。

それを見て、俺は何を得ただろうか。満足。後悔。それとも虚無か。いや、そんなことを思う間もなく、俺の命は事切れているのか。

それとも。

「ワタシが契約を無視するとでも思っていたのカイ？」

「……うわ!？」

突然天井から顔が出てきて、俺は思わずソファごとひっくり返りそうになった。

白塗りに山羊角のような髪。嫌でも目につくエナメル光沢の鉾付き革ジャケットに身を包んだのは、見間違うこともなく、さっきの男だった。

「な、何て非常識なところから出てきやがるッ！」

「イヤイヤ、意外な演出も時には必要じゃないカネ？」

「そう言う問題じゃないだろッ！」

大声で怒鳴ってしまってから、はっと気付いて思わず周囲を見渡したが、辺りには不思議なくらい人がいなかった。

いや、人がいる気配はするのだが、その姿が全く見えない。

いったいどうなっているんだ？

「何てことはない、ワタシ達が周囲に認識されなくしただけだヨ。逆に、周囲の人間をワタシ達が認識できなくなるのが玉に瑕(きず)だがネ」

「そうか、だからさっきも……」

街中であれだけの騒ぎを起こしたのに誰も気付かなかったのは、こういう絡繰りがあったためらしい。

若干得意げな顔をしていた男だが、すぐにいつも通りの薄笑いに戻って言った。

「どうかネ、妹さんの具合は」

「……回復したよ。心臓の穴は塞がっちゃいないけどな」

「ソレは結構」

大袈裟に拍手をしながら、男。いつの間にか天井から下半身を抜き出してしっかりと天井に足をつけている。

その薄笑いの奥に揺らいだ物を感じて、俺は少しだけ確信を深めた。

「……やっぱりお前か」

「ハテ、何の事やラ」

「とぼけるな。妹の夢にまで出てきやがって」

そう言うと、男はまたも嬉しそうに笑みを深めた。半分は鎌掛けのつもりだったが、どうやら本当らしい。思考を読める男のことだから、きっとこういった反応も想定内のことなのだろう。そこがどうにもムカツク。

「契約は、してないぞ」

「モチロン、契約はしてないヨ。コレはワタシの気まぐれだからネ」

「気まぐれ？」

悪魔らしいと言えば悪魔らしい。だが、魂も手に入らないのに欲望の一部を叶えるほど、お人好しなものではないだろう、悪魔というのは。

そんな考えを見通すように、男はクツクツと笑った。多分、何らかの代償を要求してくるに違いないと身構えた俺に、男は首を横に振った。

「そんなモノは要らないヨ。前払いで頂いているからネ」

「前払い？」

その言葉の意味を計りかねて、俺は首をかしげた。その様子がおかしいのか、男はやはりニタニタと笑ったままだ。

まさか、さっきの時点で魂の何割かを取られてしまったのだろうか。それとも、他に何か気付かない間に失った物が？

色々な可能性が頭をよぎったが、そのどれもを否定するかのように男は首を横に振り続けた。

「ノンノンオン。頂いたのは、もっともっと以前ダヨ」

「もっと前？」

いよいよ分からなくなった。

俺はそれ以前にこんな男に会ったこともないし、仮に会っていたとしても、こんな強烈なインパクトの男を忘れるわけがない。

なら、いったい何時のことだ？ まさか前世とか言い出すんじゃないだろうか。

ほんの少しその可能性を大まじめに考え始めたとき、いつの間にか天井から足を離していた男は、逆さまのまま俺の頭に手を置いた。

意外に温かいガントレットの感触に驚く俺に、男は囁くように言った。

「貧相なタオルでも、これくらいには暖かかったデスヨ」

「……!? まさか、お前……！」

振り返ったとき、既に男の姿はそこから消えていた。

周囲には、再び人の姿が見え始め、医師や看護師が夜中にもかかわらず忙しそうに歩いている光景が出現している。

思わず立ち上がっていた俺はもう一度ソファに身を沈め、今度こそ深いため息をついた。

最早色褪せてセピア色になってしまった記憶が、少しだけ色を戻して蘇ってくる。

昔、と言ってももう二十年近くも前、俺と妹は一匹の子犬を見つけた。

しとしとと降る雨の日で、おまけに捨てられたと思しきその子犬は全く屋根のない空き地に転がっていたのだ。

犬猫を飼うのに猛反対する両親だったため、その子犬を拾って帰ることは出来なかったが、取り敢えず寒さを凌がせるために屋根のある建物まで連れて行き、冷えた身体をタオルで拭いてやった。

妹と二人で。

その子犬は、確か透き通るような青い瞳と、艶のある黒い毛をしていた。

あの時の子犬と男は、まるで似ても似つかない感じではあったが。

「……恩返し……なのかね」

全く意地の悪い返し方だ。

そう心の中で呟きながら、俺は天井を再び眺め……そして、思わず笑った。

真っ白な天井に書かれた、真っ赤なメッセージに。

"See you in HELL, and Merry Fxxkin X'mas!!!"

(了)